

IIN が JICA 関西訪問

途上国支援の大切さ、

世界一暑い

ジブチでのコンピューター指導の体験聞く

IIN 会員 13 人が 5 月 22 日、開発途上国への多様な支援を続ける JICA 関西（神戸市中央区）を訪れました。途上国への協力の必要性を聞くとともに、世界一暑い国と言われるジブチ共和国で、コンピューターを使ったデータ入力技術などを指導した青年海外協力隊員からその体験談を話していただきました。日本とは大きく異なる風俗習慣、気候風土、言葉、食べ物の中で悪戦苦闘しながらも、同じ視点に立って深い愛情で現地の人々をリードする隊員の姿勢に、今回も脱帽の思いでした。



当日のプログラムは①JICA の事業概要の説明 ②ボランティア体験談③展示室・資料室の見学④エスニックランチの 4 本立て。

JICA とは？途上国援助の大切さ

JICA 関西国際センターの遊川章宏さん＝写真左＝が途上国援助の必要性をスライドで説明しました。その要点は－

世界には 196 の国に 76 億人が住み、そのうち開発途上国は約 8 割近い 150 か国もある。途上国では学校に行けない子供たちが 6700 万人、5 人に 1 人は 5 歳になるまでに亡くなる、といった現状を説明。

「これは遠い国のハナシではありません。今朝、皆さんは電車に乗ってきた、とします。電車は石油や天然ガス等で起こした電気で動く。お持ちの携帯電話の部品にはレアアースが入っている。コーヒーを飲んだ方もおられるでしょうが、これらの大半は途上国から来ています」。そして、「日本は車、カメラなど世界に評価が高い製品を発展途上国の人たちに買ってもらっている。我々の日常生活は、実は途上国と深くかかわっています」

開発途上国の問題 私たちには関係ない？

- 日本の食糧自給率は？
- 世界に飢えや貧困が増えるとどうなる？
- 日本の製品を買うのは誰？
- スマホ/パソコンの部品はどこから？
- 地球環境問題を放っておくと？

私たちの生活は開発途上国に依存している。

と語りました。

さらに続けて、「我々は上から目線で、途上国を支援している、と思いがちですが、日本は戦後の復興・発展のため、多額の財政支援を世界から受けた。2011年の東日本大震災では1640億円もの支援が世界各国から寄せられた」と語り、「地震などの災害が多いただけに日本は結構、多額の援助を受けている。援助国の中には貧しい途上国もかなり含まれています。お互い様なのです。情けは人のためならず」という点を強調しました。

JICAとは日本のODA（政府開発援助）の実施機関であり、二国間協力では技術協力、無償と有償の資金協力、国際緊急援助、さらに市民参加協力がある。これは、草の根の支援活動で、現地に行き、ともに生活しながら活動を通じてその国の発展の手伝いをし、相互理解を深めるとともに帰国後はその知見を日本のために生かすことを目的としている。

市民参加の活動には青年海外協力隊やシニアによる技術協力、ボランティア活動がある。

開発途上国の人づくりも重視しており、国造りの中核となる人材を育てるため、各国政府からの要請に基づき、毎年、約150の国から1万人を超える行政官や技術者などを、技術研修員として受け入れている。そして、日本での生活を通じて日本の伝統・文化に対する理解も深めてもらって帰国し、それぞれの国の発展に貢献することを期待しています。

JICA関西の場合は、地域特性を生かして防災対策（阪神淡路大震災とその復興を経験した）や琵琶湖があることから水などの環境対策の研修に力を入れている。2015年には仙台市で国連の防災世界会議が開かれ、日本の知見を反映した仙台防災マップ（被害地予測の地図、避避難経路・場所等）が採択された。

ジブチでコンピューター指導

この後、2010年から2年間、青年海外協力隊員としてジブチ共和国へ派遣され、コンピューター技術の指導をしてきた浅谷幸作さん＝写真右＝による体験談を聞きました。

ジブチはアフリカ大陸北東部、紅海の入り口に位置する小国で、面積は日本の四国の1.2倍ほど。

「特長はメチャメチャ暑いこと」（浅谷さん）。外務省の資料によると71.5度の暑さを記録したことがあり、「世界一暑い国」とも言



われる。雨は年間 10 日ほどしか降らない。暑すぎて草木が育ちにくく大部分が“石漠”という感じ。地面の温度は 60 度もある。



浅谷さんの体験によると「ふらふらして家に帰ったら 39 度の熱があった。しかし、周りが暑すぎて熱が出ていてもわからなかった」というほどだ。人種は西側のエチオピア系と南から来たソマリア系の人たちがいる。

浅谷さんは、ジブチのある市役所で、紙に書かれた出生台帳や死亡台帳をコンピューターへ打ち込む作業を指導した。日本ではパソコンにウイルスが入っていても大騒ぎになるが、一台のパソコンに 1400 個ものウイルスが入っていたこともある。紙の台帳が山積みしてあって、「これ、いるの？」と聞いたら「いらない」という返事。「使うの？」と聞いたら「使わない」。そこで、「捨てていい？」と聞いたら「ダメ！」と言われた。棚に積み重ねてある台帳を、見やすいように縦置きにしようとする大げんかになった。“抵抗勢力”も出てきた。

パソコンに打ち込んでもらったデータをチェックすると間違いだらけ。一日 100 件も入力できず、できたデータは半分に間違いがある。それなのに担当の職員たちは平気で欠勤する、遅刻する。仕事を始めても 10 分もしないうちに席を立ちコーヒー休憩、「ちゃんと入力してね」と頼んでも、いつの間にか昼食に帰ってしまう。「日本人の感覚では毎日 200 回は切れそうになる」と浅谷さん。帰国まで、残り 100 日で 6 万件ほどのデータを入力しなければならないが 1 日 100 件も仕上がらない。どうすればいいのか、浅谷さんは悩みに悩んだ、という。

そもそも、「入力業」という概念を現地へ根付かせようと取り組み始めたこと。JICA に頼んで活動支援費を出してもらうには、手続きなどに時間がかかるため、自分のポケットマネーで始めた。一軒の処理にいくらか決めて入力を始めてもらったが、受け取るとその金額について「コーサク(浅谷さんのこと)はケチだ」と言われた。「間違っただけで打ち込んで一件の処理になりません」と説得した。あれこれ工夫をこらした。家庭訪問もし、何度も話し合った結果、「チームで仕上げるのだ！という勢いに気圧されて、彼女たちの気持ちにスイッチが入った瞬間、ものすごい勢いで処理が進んだ」と言う。

ハナシは飛ぶが、ジブチに着いて 3 か月くらい。ある夜、胸騒ぎが起きた。それから 3 日後、祖父の死の報が入った。死亡は胸騒ぎの時と同じ日、同じ時

刻だった。「2年くらいの滞在なら祖父はまだ、大丈夫だろう」と思ってジブチに来た。日本のはるか遠い国なのに「人の心は通じ合えるのだな」と思ったという。

詳しい連絡を取るため、首都への長距離バスに乗っていた時のこと。荷物を盗られないか警戒しながら窓の外の間を見ていたら、涙がぼろぼろ出てきた。その時、隣に座っていたジブチの人が肩に手を置いて「おまえ、どうしたのだ」と聞いた。「実は祖父が死んだのだよ」と話したら、その人は「大丈夫だ。俺たちはおまえの家族のようなものだから」と言ってくれた。その言葉に又、涙ボロボロ。日本の満員電車の中で、誰かが涙を流していても、そういうことがあるだろうか、と考えたという。

「青年海外協力隊に入って『助けてあげなければ』と気負いこんでいたが、あー、ここにもちゃんと人がいる」と感じた。そして、「この人たちは、できないのではない。知らないことがあるだけなのだ。それを伝えてあげればいい」と思うようになった。そこから彼女らとの心の交流が芽生え始めた、という。

心が揃い、ピッタリ通じ合って仕事が進みだすと、間違いは減り、不思議なほどの勢いで入力が進み、6万件のデータ入力は無事、完了した。「どうやって完成させたのかは今や、誰も思い出せない」と浅谷さんは言う。

展示室の見学

このあと、一階にある展示室の見学。パネルでの広報展示のほか、途上国から寄せられたユニークな衣装や楽器などがあり、見て、触って、体験できるようになっています。同じ打楽器でもそれぞれに音の特長があって違いの面白さを感じさせてくれました。

展示室で JICA の活動や途上国からの民芸品を見学する IIN の皆さん



ランチはバングラディッシュ料理

最後に月替わりのエスニック料理を楽しみました。5月はバングラディッシュ料理で、スパイスとヨーグルトでマリネした鶏肉入り炊き込みご飯、レンズ豆と



各国の食文化を楽しめるランチです

スパイスで煮こんだスープ、人参をミルクやスパイスで固めた団子などでした(720円)。この日、IINのメンバーたまたま、別の場所での食事でしたが、普段は一階ロビーの食堂で、途上国からの研修生や一般市民と一緒に食事を楽しめます。

以上

以